

[学術資料]

学生の就業力育成に向けた実践的試み

—コミュニケーション力を中心に—

Training for Basic Communication Skills for the Japanese Workplace
: The Case of College Students

山 田 陽 子

Yoko YAMADA

Studies in Humanities and Cultures

No. 20

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 20号
2014年2月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
FEBRUARY 2014

[学術資料]

学生の就業力育成に向けた実践的試み

ーコミュニケーション力を中心にー

Training for Basic Communication Skills for the Japanese Workplace : The Case of College Students

山田陽子¹
Yoko YAMADA

- 1 研究の背景・問題意識
- 2 就業力の育成に向けて
- 3 教育実践
- 4 最後にーコミュニケーション力を育む

要旨 大学の教育現状をもとに、学生に就業力を身につけさせる指導のあり方を検討する。社会人基礎力や就業力の育成に関しては、その必要性が長年にわたり言われてきているが、体系的な研究や教授法の開発が少ないことから教育上の困難を感じる教員が多い。本稿は、教育指導法・教材開発の積み重ねによる学生への適切な指導と学生の関心を高める授業デザインが教員に求められているのではないかという問題意識に基づいたものである。

実際の授業で試みた学生の実践事例、インタビュー・質問紙調査、参与観察等を通して、学生の主体的な取り組み、対人関係を意識したコミュニケーション力を育む演習と教育指導法について考察した。本稿の位置付けは、大学生・短期大学生を指導する教員は、どのように就業力を育成したらよいのか、さらにはどのようにしたら学生が社会で役立つ能力を身につける手助けができるのかを考えるための予備資料である。

キーワード：就業力、社会人基礎力、実践、コミュニケーション力、大学教育

1. 研究の背景・問題意識

汎用能力（「企業が求める力」）を調査した見館（2012）は、北九州市を代表する企業団体の採用もしくは人材育成担当者への半構造化インタビューから、①多様な人たちと協働する力、②ストレス耐性、③課題を解決する力を抽出した。その他の能力として、社会から大学および短期大

¹ 名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了生 名古屋市立大学非常勤講師

学に対して、コミュニケーション教育、たとえば「話し方」、「聞き方」、「対話力」が指摘されることも多く、状況に対応できる力、自分の言いたいことを正確に伝える力、相手の意見や主張を理解する力など「きく^(注1)・話す」力を育成することが教育上の課題となっている。

また朝日新聞主催の「グローバル人材の育成と活用」をテーマにしたフォーラムの基調講演では、学生の論理力、場面や役割に応じた「考える力」などの重要性について話し合われた。これらの能力は、いわば社会を生き抜くための不可欠な力と捉えられ「社会人基礎力」^(注2)といわれる。吉田（2013）は、「大学では、学士課程教育という大枠が重視されるなか、教養教育と専門教育とに有機的な関連をもたせるべきことが、一層求められるようになった。有機的な統合とは、一つには専門教育の高度化、もう一つは専門教育の学際化という方向がある」と述べている（吉田、2013、233-234）。澤田（2008）は、「学生たちが卒業してから入る職場は、様々な専門をもつ人たちと過ごす社会である。つまり、働く場所は様々な専門や様々な分野の人が話し合い、協力し合って問題を解決していく場所になっている。そこでは、自分と異なる専門の人たちを理解し、また自分の持っている専門能力を最大限に発揮する能力が必要とされる。」と述べている。

学生たちが卒業後に入った職場では、実務の即戦力や人間関係重視からコミュニケーション力^(注3)を要求される。2009年の経済産業省調査（「大学生の『社会人観』の把握と『社会人基礎力』の認知度向上実証に関する調査」）で「身につけてほしい能力水準」の内、学生の認識では「十分できている」が、企業の認識では「まだまだ足りない」としている項目に「コミュニケーション力」があり、企業と学生で大きな意識差があることが報告されている（日本ビジネス実務学会近畿ブロック研究チーム、2011）。

ちなみに、大学教育と企業で求められる能力のギャップ解消を目指して教材を開発しているベネッセコーポレーションでは、就業力を「課題解決力」と定義し、問題解決力の指導における課題を表1のようにあげている。

表1 【問題解決力を指導する場合の課題（上位5位まで記載）】

	(%)
指導法が難しい（教授法の開発が必要）	67.6
指導者の育成が難しい・人材不足	47.9
良い教材がない	42.3
学生の興味関心が低い	31.0
授業時間が足りない	25.4

出典：Benesse教育研究開発センター「大学生の能力育成に関する調査報告書—学部長を対象に」（2009年1月）、VIEW212011 EXTRA EDITION Vol.2、36頁「社会へのパスポート『力』」

表1の結果に現れているように、教員が学生に対して「問題解決力」を指導することに困難を覚えていることがわかる。良い教材がないうえに、学生の興味関心の低さが一因に挙げられている。

一方、文部科学省では、平成22年度から23年度にかけて「大学生の就業力育成支援事業」、24年度からは「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」を実施している。大学等には、漠然とした職業観・勤労観のままの学生を社会に送り出すのではなく、学生たちが地域・社会において、何をしたいのか、何ができるのか、自問し答えを見つけていけるようにすることが求められている。これらを通じ、就業力育成のためのカリキュラムや教育手法の改革、学生の社会的・職業的自立につながる就業力の育成、産業界のニーズに対応した人材の育成がなされることが要請されている。

また自由が丘産能短期大学では、就業力を「現場を捉える力」とし、働く現場の課題解決力の育成、授業科目の連携による学習効果の向上、教職員の就業支援能力の向上などを目指す取り組みを行っている^(注4)。そこでは学生が自らの就業力を確認し、就業力育成の成果を実感できることが重要だと考えられている。広島経済大学^(注5)では、「人間力と社会人基礎力のつながり」に関する表を作成している。そこでは人間力を「元気力」、「行動力」、「企画力」、「共生力」から捉え、社会人基礎力を構成する能力との関係性を示している。

表2 広島経済大学資料【人間力と社会人基礎力のつながり】

(出典：経済産業省・河合塾、2010、375)

人間力	社会人基礎力
元気力	主体性
行動力	働きかけ力 実行力
企画力	課題発見力 計画力 創造力
共生力	発信力 状況把握力 傾聴力 規律性 柔軟性 ストレスコントロール力

社会人基礎力の育成手法としては、大学が決めた一定の科目履修者に対し、知識の習得に加え、「元気力」、「行動力」、「企画力」、「共生力」の4つのフィールドで設定した達成目標をクリアさ

せることを目標としている。また社会人基礎力の評価手法として、4つの力と社会人基礎力の12の能力要素を融合させ、大学の独自性を加味しながら個々の学生の自己評価の基盤としている。人間力は、多様な社会人基礎力とつながり、両者は切り離すことのできない関係にある。社会に出れば、学生たちは多くの能力を磨くことで就業力を向上させなければならない。そのためには、在学中に基礎的な能力を身につけておく必要がある。就業力育成に関しては、その必要性が長年にわたり言われてきているが、体系的な研究が少ないことから指導法における困難を感じる教員が多いのではないだろうか。教員の指導法や教材開発の積み重ねを行うことによって、学生に適切な指導ができるようになり、また学生の関心も高められる仕組み作りが求められているのではないだろうか。

本稿は以上のような問題意識に基づき、大学の教育現状をもとに、学生が就業力を向上できる指導のあり方を検討することが目的である。そして授業で試みた学生の実践事例、インタビュー・質問紙調査、参与観察を通して、今後の授業デザイン構築に向けた教授法を考える準備としたい。本稿の位置付けは、大学生・短期大学生を指導する教員は、どのように就業力を育成したらよいか、さらにはどのようにしたら学生が社会で役立つ能力を身につける手助けができるのかを考えるための予備資料である。

2. 就業力の育成に向けて

社会人として職場や地域社会で活躍するために必要な能力の一つである就業力育成のための教員の心構えについてまず考えたい。

就業力の育成に向けた授業計画では、担当教員は授業形式の工夫を行う必要があると考える。講義とともに「演習（ワーク）」を取り入れながら、学生にきめ細かく実践指導を行うことが重要ではないだろうか。講義だけでは学生が「きく」、「話す」、「課題解決」などの能力を身につけることは困難であり、対人関係を意識した演習が必要と考える。

学生に効果的なワークの方法としては、教員が手本を示し、できるだけ多くの体験を学生に積ませ自信をもたせることである。たとえば教室を職場に見立て、教員と学生が上司・部下の役割を演じる「ロールプレイ」の実践も一例である。また同じ受講生の意見、いわゆるピアフィードバック^(注6)も取り入れ、ワークの改善をともに考えることも必要であろう。教員フィードバックだけではなく、同じ受講生としての立場である学生からのフィードバックは、学習支援として有効である。それは、主として教員や学生自身が気づかなかった課題を発見でき、フィードバックでの指摘を受け入れて改善に結びつけることができるからである。

学生同士が学び合う場を構築するためにも、演習では、「発表」、「ディスカッション」、「フィードバック」を取り入れたい。授業の中でワークの事前学習としてのコミュニケーションを深めるためのディスカッション（話し合い）が有効である。学生の理解を促進しながら現場体験の実

実践型トレーニングを行うことで、学生にできるだけ負担のかからない方法を考案したい。

職場における会議の場面では、質疑応答のスキルも必要になる。スキルの向上には、教員がことばだけではなく身ぶり手ぶりなどの「しぐさ」も指導することが重要ではないかと考える。たとえば教員が実際の現場状況を設定し、学生の前で演じてみせる取り組みが有効と考える。教員が演じる多くのモデル例をとおして、学生は語調、声の大きさに加え、状況に応じた身ぶり手ぶりなどの非言語コミュニケーションを実体験的に学ぶことができるからである。たとえば顧客からの苦情処理、迷惑をかけた上司への謝り方などの実演では、おじぎの仕方、適切な日本語表現、敬語使用等の実演が、学生の言語・非言語コミュニケーションの体得に役立つと考えられる。

次に「社会人基礎力」の特徴の一つである「チームで働く力」を育てるグループワークの留意点を考えたい。グループワークではグループの最適人数を把握し、グループ数を考えなければならない。実際に授業の中で行ったワークでは、関心のあるテーマで学生にポスターを作ってもらい、みんなの前で口頭発表してもらった。各学生の口頭表現技術に関する学習歴を考慮して、一人での発表、二人での発表、三人での発表の3タイプから選択してもらった。学生は、一人より仲間での協働によるポスター作成およびグループ発表を選択するケースが多かった。一人での発表を選んだ学生は自分のペースで着々と発表準備が進んでいた。また二人、三人グループでの発表を選んだ学生は、相談しながらポスターを作成し、発表部分の分担を決めチームワークとしての成果をプレゼンで発揮できた。

最終的にプレゼンまでの一連のワークを振り返ることで、教員は学生に学生本人の話し方を認識させる工夫が必要と考える。やりっぱなしの状態ですべて完了させるのではなく、ワークのプロセスで考えたこと、感じたこと、やり遂げたことを認識させることが達成感につながることも多い。学生自身の振り返り^(注7)には、DVD、ビデオ、チェックシートなどを用い、自己課題の発見につながる授業になるような準備が必要である。

3. 教育実践

実践事例を紹介する前に、企業で働く人へのアンケート調査（2013年8月実施）の結果を示し、企業人が重要視する能力について考えたい。「学生時代に身につけておいたほうがよい能力」を調査する目的で、勤務経験が豊富な企業人にあらかじめ電話で調査目的を説明した上で記述の依頼をし、以下の質問紙を送付して記述後に用紙を返送してもらった。その中から3名の記述を紹介したい。人数は多くないが、丁寧に詳しく記述してもらうことで調査目的が達成でき、企業人が重要視する能力が示された。

- 質問1. 会社で働くには、どのような能力が必要だとお考えですか。(自由記述)
2. あなたは、学生の就職に当たり、学生時代にどのような能力を身につけておいてほしいと思いますか。(自由記述)
 3. 職場の人・取引先の人たちのあいさつや態度で気になる点を教えてください。(自由記述)
 4. あなた自身は、職場でどのようなことに気をつけていますか。(自由記述)

[回答]

Aさん (60代男性、商社勤務)

1. 他社員との協調性とコミュニケーション能力および責任感。
2. 英会話能力 (英検2級以上)
3. 正確な敬語を使えているか。報告が一方的でないか、途中経過、結果がタイムリーになされているか。
4. 上司・部下への気づかい。「BAD NEWS FIRST」で、「悪い事」を真っ先に報告する。報告を起承転結にする。

Bさん (50代男性、会社社長)

1. 日本の会社で働くとするれば、①仕事を前向きに取り組む積極的な姿勢、②仕事をこなす能力、③他の従業員と協力して業務ができること (協調性)、④その仕事の社会性を認識できる能力 (その仕事がどのように社会に還元しているか) が特に必要と考えます。
2. ①他人と協調して仕事を行う能力、②何事もすぐ諦めないで、粘り強く行う能力、③社会的公共性を思考できる能力。
3. これは、職場の上司の方が重要なことかと思われませんが、自分から積極的に挨拶を実施することが、まず肝要かと思われます。また、他人の意見を頭ごなしに否定することは避けたいです。
4. 管理者として、①常に心は平静を保つ＝感情的にならない＝すぐ怒らない、②一度部下に仕事を任せたら、些細なことには関与しない、③部下が仕事を完了したら、必ず労いのことばを言う、④自分が多忙でも、部下には暇なふりをする。

他に思ったこと：大学生の就職活動を見ていると、洪水のような多種の情報に振り回されている気がします。よく会社の面接時に若い就活担当者が、細かい様々なことを聞いてきますが、最終の重役面接では些細な事は聞かれません。つまり、会社

が真に欲している人材とは単純ですが、「やる気があって、一生懸命働いてくれる人材」です。ですから、学生は自分のやる気を如何にPRできるかがポイントかと思われます。つまり、やる気がなければ就活は失敗するということです。あと、よく「個性を重視する云々」を聞きますが、(会社によりますが)日本の会社ではそれ程個性は重要視しません。所詮組織に入ってしまうと、その辺の個性など必要はありません。個性よりも協調性のほうが重要ではないでしょうか。

Cさん(40代女性、シティホテル勤務)

1. 対人関係において、相手の意図を理解する能力。相手に自分の考えをわかりやすく伝える能力。(コミュニケーション能力)
2. 文章を書く能力。礼儀作法など。
3. 敬語の使い方。自分から挨拶ができない。声が小さい。
4. 周囲との連携。状況判断。正確な処理。仕事の優先順位。
5. 常に向上心を持ち、興味をもちながら仕事をする。(感謝する心は、人として忘れないように努めることだと思います。)

以上の調査結果は限られたものにすぎないが、会社で働くために必要な多くの能力の中でも「協調性」、「コミュニケーション能力」や「気づかい」の重要性を示唆するものである。そこで、学生が相手に気づかいしながら協調してコミュニケーションに取り組む活動例を紹介したい。授業では教員による講義に、コミュニケーション力を育む事前学習として学生の能動性を引き出すことを目的にした活動を加えた。授業の中で行った学生主体のコミュニケーション活動、終了後の学生の主たる感想を記述する。

[事前学習活動例]

①自作ポスターによるプレゼン

まず、学生自身が関心のあるテーマでポスターを作成し、それを手に持つ、あるいは黒板に掲示して5分間のプレゼンテーションを行う活動である。みんなにわかりやすく伝えられるように、ポスターの大きさに注意すること、文字は見やすく丁寧に書くこと、口頭発表に関しては教室の奥の席まで聞こえるように大きめの声で行うこと、下を向いてばかりいないで教室の学生へのアイコンタクトにも気をつけることなど話し合った。

プレゼンに関しては一人、二人、三人での3パターンの発表形式を学生に選択してもらった。学生のテーマ、学習体験、力量によって適切な発表人数も考えなくてはならない。専攻分野の異なる学生の選択科目のため、グループワークだけにすると学内であまり顔を合わすことがなく打

ち合わせが困難な場合もあるため、一人での発表もよいことにしている。各学生が主体的に取り組むことが重要であると考え、最大でも三人までのグループとした。学生たちは教室で相談しながらグループ作りを行った。

テーマに沿って考えたポスター作成を一人で行う学生、グループで相談し分担作成する学生により作業が進められた。学生たちは自宅でも発表練習を行っていた。授業では中間発表会として、進み具合をグループ毎に発表してもらった。学生は責任をもって進捗状態を報告することと他のグループの中間発表を聴くことでモチベーションを高めた。本番のプレゼン発表会では、彩色を施していいいなポスターで、テーマをわかりやすく表現したものが多く見られた。一人の発表に比べ、グループ発表ではポスターの完成度とプレゼンテーマに関する調査内容にレベルの高いものが多く、チーム力と情報収集力を感じさせた。また各グループは、リーダー的存在の学生を中心にまとめ、リーダーシップのもとで速やかに作業が進められていた。自分たちで決めたグループにおける各自の役割を明確に自覚し、分担作業をこなせた。

プレゼンテーマについては学生それぞれの関心分野が異なり多様であったが、共通するのは学生の将来、とりわけ専攻分野を生かせる職業に繋がるものが多かった。たとえば、希望職種に関する企画・提案をテーマにしたプレゼンである。

このプレゼンワークの特徴は発表で終了するのではなく、発表を振り返ることで知識の獲得、定着や技術の向上に役立てることである。ワークにおいては、学生に自分の発表だけではなく、他の学生の発表もよく聴き、発表内容や話し方等に関して観察・評価しながら課題を考えてもらった。

発表日には学生全員に観察・評価シートを用意し、評価方法を説明した。学生は各発表をよく聴き、評価シートにプレゼンの内容・話し方・ポスターの項目別に5段階評価をし、感想および改善点に関して記述した。自分の発表に関しては自己評価を記述する欄を設けた。全員のシートを回収し、評価の高い順に1位から3位まで決め、表彰した。実社会では、職場の人たちのプレゼンの中から、わずか一つか二つの採用案が決定される厳しい競争があるだろう。ワークの中で少しでも現実に近づける工夫をすることも必要ではないかと考えた。自分たちの発表日を自分たちで決めることから始まって、テーマ決定、中間発表、プレゼン本番、観察・評価作業まで一連の作業を学生自身が責任をもち、取り組まなければならない状況であった。

観察・評価シートは「振り返り」に活用した。自分および他学生の発表内容やプレゼン方法を深く考え、課題を発見してほしいと考えたからである。このワークで学生はプレゼン発表者であるとともに他学生のプレゼンを評価する観察者としての立場も学習した。このワークではあくまでも学生が主体となって取り組むことができるように留意した。

終了後の学生の声

「みんなの前で話すことや多くの人にわかりやすく伝えることの難しさがわかった。」

「他の人のプレゼンを聴いて、発表者本人の考えもわかったし、知識も増えた。次に自分が発表するときの参考になった。」

学生の多くが「大勢の前で話すことで緊張した」と筆者に述べていた。しかしながら、他学生の発表をよく聴き観察することで、自分の発表には無いもの、発表者の課題、自分自身の課題への気づきも生まれたことがわかった。

②ディスカッション

大学生数名で机を囲み、グループディスカッションを行った。一回のディスカッションの時間を30分間に決めた。学生一人が司会を担当し、テーマごとに司会を他の学生に交代することにした。司会者は学生たちの話題がテーマからそれていないか、また時間配分はよいか気を配りながら進行を務めた。

ディスカッションの事前準備として、テーマに沿った明確な意見・考えを盛り込んだ意見文を書かせることで「考え抜く力」を意識したワークにすることが重要であると考えた。そこで、聴き手に理解してもらえるようにわかりやすく書いた意見文を学生に発表してもらった。発表後、他の学生から質問・コメントが寄せられた。一連の質疑応答から改善点を発見した学生は、当日までにより良い発表に改善できた。

各授業において、学生に話し合いたいテーマを提出してもらい、その中から時節に相応しいテーマあるいは社会問題のテーマを一つ選んでディスカッションを行った。ディスカッションの場では、一人の学生だけの話にならないように、各学生が意見を述べ話し合いを活性化させることを確認事項として伝えた。興味あるテーマでのディスカッションでは意見交換が活発に行われたので、質問する力、説明する力、考え抜く力の育成に役立つと考えられる。ディスカッション後の学生の感想では、「他の学生の意見を聞き、深く考える姿勢が身についた」とあった。他学生の話し方に接し、自己課題の発見もあった。評価シートを作成し、各ディスカッション後の振り返り時に、自己評価とともにディスカッション全体の感想を書いて提出してもらった。教員のコメントを付けてシートを翌週返却した。

終了後の学生の声

「みんなの意見や考えを聞いて、社会のことがよくわかった。知識が増えてうれしかった。」

③新商品の企画と提案

学生が関心をもつ分野から、新しい商品を企画してもらい、どのような商品で、どのような機

能があり、どのような対象の人に薦めたい商品かなどを発表する。学生たちは新しいケータイ、菓子、アクセサリ、事務用品、書籍、衣料品、傘、バッグなどの商品を考案した。クラスを「小さな社会」、教室の学生たちを外部者的存在の「客」と見立て、新商品の特徴や推奨ポイントをわかりやすく説明した。創造力だけでなく、客のニーズを的確につかむ能力の育成にも役立てたいと考えた。質疑応答と学生フィードバックの時間を設けた。演習に際し、クラスのチーム力で、より良い商品を社会に企画・提案できるよう話し合った。

終了後の学生の声

「このような発表は、職場で必要になると思うので、やる気が出た。」

多くの学生が上記のように答えており、教室活動においては、就業力に結び付く、職場で役立つワークの重要性を確認した。

本活動を実践したコミュニケーション授業において、受講生に自分自身の話し方とコミュニケーションに関する自己評価アンケートを実施した（表3）。

表3 話し方とコミュニケーションの自己評価

(授業4回目、受講生19名、2013年5月実施)

	はい	いいえ	不明(人)
相手によって言葉を選ぶ	19	0	
場によって言葉づかいに気をつけている	18	1	
相手に笑顔で接している	17	1	1
相手を見て話す	15	4	
はっきりとした声で話す	15	4	
自分から進んで挨拶をする	13	6	
身ぶり手ぶりを交えて話す	13	6	
苦手な人とも協力して物事を進める	10	9	
元気のない人がいたら話しかける	9	10	

表3の自己評価アンケート結果から、「場によって言葉づかいに気をつけ、相手によって言葉を選択している」学生は多いことがわかった。その一方で、苦手な人と協力して物事を進めることや、元気のない人がいたら話しかけるなどの項目における自己評価はやや低いことがわかった。場の雰囲気を考え、相手への気づかいはあるものの、気づかいから一歩進んで実際に「話しかける」ことや苦手な人との協働には自信をもてない学生もいた。表に示した自己評価結果は、あくまでも1クラスの学生の自己評価結果に過ぎないし、主として「話す」力に関する評価のため、今後学科・学年が異なる学生や他大学生など多層にわたる調査、「話す」以外の能力に関する自

己評価アンケート等を行う必要があるだろう。

表3の結果に現れた言語・非言語を使用しコミュニケーションをとる段階で自信をもてない学生には、どのような指導が必要なのだろうか。授業で自分の本当の気持ちをことばで伝えられなくて苦しそうな学生に出会うたび、筆者は「話す能力」の育成が重要ではないかと考えてきた。大勢の学生に演習を指導してきた教員の話^(注8)では、「ことばが出てこない学生」が最も困ると言う。頭の中で考えがまとまらず、何を話したらよいのか話の組み立てができない学生がいると言う。だから、まずは大きな声で挨拶をするように指導しているとのことであった。このような学生には挨拶から次第に「話す」ことに繋げ、続いて話すだけではなく、しぐさにも配慮できるよう教員がモデル例を示していくことも必要ではないだろうか。

次に、およそ2000人を擁する団体に指導的立場にある人の話^(注9)を聞くと、学生にはぜひ「表情」に気をつけてほしいと言う。話をしている間、笑顔が全くないとコミュニケーションがとりにくいと語る。職場ではひとりで行う仕事より様々な人たちと話すこと、聞くことが多いので、コミュニケーション力が最も大事だと話している。この二人への聞き取りから、話をよりわかりやすく補足する非言語コミュニケーションの重要性も認識できた。

④他己紹介

教室内で学生は自ら相手を見つけペアを組む。お互いに相手のこと（所属、名前、出身地、趣味、特技、家族、生活のことなど）を5分間ずつ聞き取り、相手のプロフィールをまとめる。ペアの二人が交互に相手を紹介する。

自分で自分を紹介するのと違い、他の学生のプロフィールを紹介するのは、それほど困難ではないようであった。学生は相手の学生に対して熱心にインタビューを行い、多くの情報を仕入れて、具体的にその人の良さや特徴が浮かび上がるような紹介ができた。発表の際には声の大きさ、教室の学生たちへの視線（アイコンタクト）も考慮しながら落ち着いて話せた。他人を紹介することは、自己紹介するうえで役立つと思われる。「他己紹介」は少人数クラスでも行えるワークである。90分授業内に自己紹介と他己紹介の二つの練習を取り入れた。

終了後の学生の声

「自分のことをPRするのはためらいがあるが、他人のことだと思い切りほめることができるので、自己紹介より他己紹介のほうが楽だった。相手が自分のことを紹介するのを聞き、自己紹介の参考になった」

このワークでは、相手の良いところを発見し、ありきたりの紹介にならないようにあらかじめ具体例をあげて説明を行った。

⑤ 1分間スピーチ

身近な話題、関心のある話題、新聞記事などからテーマを決め、1分間で話せるように発表原稿を作成する。学生は書き上げた原稿を読み、時間を計る。ここまですべて個人の作業で、あとはグループでの作業になる。学生を3人1組のグループに分け、グループ内で一人ずつ発表を行い、他の二人の学生に聞いてもらう。グループの学生から自分の発表内容、話し方等に関するアドバイスや意見などのフィードバックをもらい、自分の原稿をより良いものに修正する。各グループは代表1名を選ぶ。代表者は完成原稿をもとにみんなの前で発表する。

終了後の学生の声

「他の学生の発表を聞いて、自分の足りない部分を発見できた。」

「話すスピード、声の大きさ、ボディランゲージの使い方がわかった。」

「テーマが自由なので、発表内容を早く決める事ができた。」

⑥ 2分間あいさつ運動

時間は2分間に限定されるものではないが、ここでは授業時間内のワークとして2分から5分程度が適当と考える。決められた時間内に何人の学生とあいさつ（最初のあいさつ→自分の名前を言う→どうぞよろしくお願ひします→握手）ができるか、まず教室内であいさつする相手を見つけ、一連のあいさつを行い握手してから次の学生に向かう。学生は2分間に、少ない学生で3人、多い学生で6人に対してあいさつができた。教室の中であいさつをする学生を早く見つけること、自己紹介すること、コミュニケーションをとることが主要な項目である。

終了後の学生の声

「学科や専攻の違う学生とも交流ができてよかった。」

このように、学生が楽しみながら活動でき交流を深められたことが実践の成果であった。このワークの課題としては、実践にある程度の人数を必要とし、少人数クラスでは困難なことである。

以上、本項目では6種類のワークを紹介した。筆者の参与観察から、「学生の意欲の向上」が実践の効果としてあげられる。学生たちは、実践の効果をどのように捉えているのだろうか。学期の演習終了後に学生に聞いた結果は表4のとおりである。

表4 演習の効果

（自由記述、複数回答、学生17名）

わかりやすく伝える力がついた	5
人前で話をすることに慣れた	4
コミュニケーションがとれるようになった	4
社会で役立つと思った	4
自分の良い点・悪い点を見直すことができた	3
自信が生まれた	2
あがり症を克服できた	2
声を出すことで自然に覚えることができた	1
要領をつかむことができた	1
その他	6

本項目①から⑥のワークは、4年生大学1年の受講生44名と短期大学2年の受講生23名の教室活動である。本項目で教育実践として紹介したのは、話すスキルとコミュニケーション力を身につける事前学習のための実践事例と学生の感想に過ぎず、コミュニケーション力・就業力の向上や成果を実証できていない。効果の測定が課題であることをことわっておきたい。ただ、「話す」こと、「議論する」こと、「質疑応答」等のスキルにおいて、学生が社会人になる前段階の心構えと自信ができた。これら実践の成果は、教員がワーク実践方法やワークの効果を丁寧に説明し、学生の主体性、意欲、創造力、課題発見力等をどれだけ引き出すことができるかにかかっていることである。専攻分野の異なる学生が共通にもっている興味・関心を発見し、議論に取り組めることや重要な課題ディスカッションを学期末に実施するなど授業計画を見直すこと、教員自らの「引き出す力」を向上させながら授業デザインの構築にあたるなどの工夫が求められる。

4. 最後に—コミュニケーション力を育む

冒頭で「企業の認識ではまだまだ足りないとしているコミュニケーション力」について述べたが、「コミュニケーション力」とは、「きく」、「話す」スキルを身につけることや相手に自分が思ったことを伝達する能力だけをいうのではない。職場で上司から「次週の企画会議でプレゼンを頼む」と言われて、「とても無理です」と言うだけでは、コミュニケーション力があるとはいえない。実際の場面では、どうして無理なのかを上司にわかるように説明ができる能力、あるいは「次週の企画会議でプレゼンできない」ことを、その場で言うべきか否かの判断能力などが必要である。職場では上司に「とても無理です」と言うだけでなく、その前やその先に場面・相手に応じた言葉を発することが要求される。思ったことをありのままに伝達することが職場の人間関係を円滑にするとはいえない。現実の職場で出会う言語表現は、場面や相手との関係性から捉えられるものである。

就業力は短期間の学習で育成できるものではないので、大学生活の中でもなるべく早い時期から対策を始めたい。教養教育のスキル化と呼べる現象が登場し、大学教育への適応支援を目的とした科目、文章理解・表現、プレゼンテーションに関する科目の必要性が学部の専門性とかかわりなく生じている（吉田、2013、231-233）。教養教育の中で、学生には授業内容に含まれる社会人基礎力育成のための演習の必要性、社会でのスキルの生かし方、スキルを身につけたことによる効果等が理解できる授業展開がなされることが望ましい。教員は実際の場面に合致した会話を提示することに心がけ、社会の現実を学校へ持ち込む（経済産業省・河合塾、2010、532）試みが効果的である。実際に社会人となり会社で働く場合、上司とのコミュニケーションが重要である。さまざまな階層の人たち、さまざまな年代の人たちを念頭に置いたコミュニケーションのあり方を想定した実践に取り組まなければならないだろう。コミュニケーション力育成には講義だけでは困難であり、実践の必要性を確認できた。したがって学生が将来設計を明確に描き、目的意識をもてるように、教員だけではなく現実の企業人とのコミュニケーションによるワークが必要になるだろう。たとえば、卒業生を招いて体験談や職業観を語ってもらうこと、卒業生の会社を訪問して職場をよく見学し、実際に働く人たちの声を学生に直接聞いてもらうこと、企業人に教室活動に参加してもらうことなど社会の現実を感じられる臨場性のある試みである。

ところが、このような試みを授業に持ち込んだ際に、学生から「このような授業の期末試験では、どのような出題内容になるのですか」と聞かれることがあった。質問した学生の関心は、期末試験で合格点を取り単位を取得できることである。そうした学生にとって期末試験対策がよくわからない授業は学習意欲を低下させかねない。正解のない実践、あるいは正解を問わない実践を課す授業の意義や成績評価方法を学生に具体的に示し、理解を深めてもらう努力が必要であろう。

授業デザインにおいては、教員は学生の演習を観察し授業を受ける学生の視点に立脚し、身をもってワークを体験することで問題解決を探求しながら構築することが重要である。さらに教員には、大学教育と実務を繋げる取り組みや実践だけに終止するのではなく、学生の職業・社会への関心と将来への夢・希望をもたせるメンタルサポートが必要である。とりわけ重要なことは教員が一方向的に教え込むのではなく、学生の主体的な学習を促進することである。そのためには、教員は学生の生活習慣や言語生活などを理解し、授業内容に反映させる工夫をしなければならない。その意味から学生だけではなく、教員自身にもコミュニケーション力が求められている。

本稿の課題は、実践効果の測定や教員、企業関係者、学生への聞き取り、アンケート調査の継続だけではなく、それらの分析結果から得た知見を就業力育成に生かすことで、学生自身が学習成果を実感できる取り組みを提示することである。今後も授業体験で得た知見を蓄積しながら、緒に就いたばかりの研究を前進させたい。

謝辞：インタビュー、質問紙調査、実践にあたり、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

注

- (1) 日本ビジネス実務学会近畿ブロック研究チーム（2011）の『報告書平成22年度教育技法受託研究「きく・話す」能力の教育方法—社会人基礎力を中心として—』、同学会（2013）の『「きく・話す」教育指導法セミナー授業進行マニュアル』ほか『「きく・話す」教育指導法セミナー』資料では、「きく」という表記を使用している。本稿ではそれらにならない、「聞く」「聴く」「訊く」を包含する意味で平仮名の「きく」という表記を使用する。
- (2) 朝日新聞2013年2月21日朝刊13版18「自分の頭で考える」朝日教育フォーラム「グローバル人材の育成と活用」紙面で、経済産業省経済産業局参事官の奈須野太氏は、多様な人々と仕事をしていくために、「前に踏み出す力、考えぬく力、チームで働く力など『社会人基礎力』が必要」であることを述べている。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という3つの能力とそれらを構成する12の能力要素（主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）のことで、変わる社会の中で、教育のあり方を問い直すために生まれた力の捉え方であり、職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要である基礎的な力としている。「ビジネスマナー」や「慣習」といったものではない。しかし、「社会人基礎力」は、社会人として活躍するために必要な能力の一面ではあるが、これだけでは不十分で、社会で働くためには「基礎学力」や「専門知識」が必要である。「社会人基礎力」だけを単独に高めるのではなく、よい経験や活動により循環的に向上するものと考えられる。（引用：経済産業省編・河合塾発行（2010）『社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために—』朝日新聞出版、2-3頁）
- (3) 言語学用語でいう「コミュニケーション能力」は、要素として、文法的能力、談話能力、社会言語能力、方略的言語能力があげられている。本稿で使用する「コミュニケーション力」は、主として就業に向けて必要な能力、とりわけ「他者とコミュニケーションを図ることができる能力」を指している。具体的には協調・相互信頼をもとに、職場の人間関係を円滑にするための「きく」、「話す」、「質問する」、「説明する」、「伝える」、「表現する」などの能力をはじめ非言語コミュニケーション（ボディランゲージ、アイコンタクトなど）も含む。
- (4) 「自由が丘産能短期大学ホームページ」<http://www.sanno.ac.jp/tandai/employability/>に詳しく紹介されている。参照されたい。
- (5) 学部教育との整合性をとりながら、成績表とともに全学生の在学中の活動実績を就職活動等の場面で活用できるシートを企業に提示することを目標に、体系的な社会人基礎力育成のための教育プログラム評価システムの基盤を構築している大学である。
- (6) フィードバックとは、結果を原因に反映させることをいう。評価結果を学習者本人に伝えることを指している。本稿では、教師や受講仲間が発表者に対して文法上、内容上の誤りや気づいた点を伝えることおよび教師がスライド表現、発表原稿を添削することなどを含めて使う。同じ学習仲間からのコメントや意見、指摘などを「ピアフィードバック」という。
- (7) 学生自身の振り返りの意義については、山田陽子（2012b）『『日本語プレゼンテーション』授業における学習者自身の『振り返り』の意義』2012年度日本語教育学会研究集会第9回中国地区（山口大学）予稿集68-73頁に記述している。参照されたい。
- (8) 2013年6月に、教員（50代、男性）に対して行った聞き取りによる。
- (9) 2013年6月に、多くの部下をもつ組織の役員（60代、女性）に対して行った聞き取りによる。

〔参考文献・資料〕

- 朝日新聞2013年2月21日朝刊13版18「自分の頭で考える」朝日教育フォーラム「グローバル人材の育成と活用」
- 経済産業省編・河合塾発行（2010）『社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために』朝日新聞出版
- 澤田美恵子（2008）「大学におけるキャリア教育—正統的周辺参加に基づく教育プログラムを事例として—」日本キャリアデザイン学会『キャリアデザイン研究』vol.4、5-18
- 日本ビジネス実務学会近畿ブロック研究チーム（2011）『報告書平成22年度教育技法受託研究「きく・話す」能力の教育方法—社会人基礎力を中心として—』同学会
- 日本ビジネス実務学会（2013）『「きく・話す」教育指導法セミナー授業進行マニュアル』ほか『「きく・話す」教育指導法セミナー』資料一式
- 見館好隆（2012）「課題解決型学習で『企業が求める力』は育成できるのか—オープンキャンパスプロジェクト参加者と非参加者との比較—」『ビジネス実務論集』日本ビジネス実務学会pp21-34
- 山田陽子（2012a）『コミュニケーションのための話し方練習帳』黎明書房
- 山田陽子（2012b）『『日本語プレゼンテーション』授業における学習者自身の『振り返り』の意義』2012年度日本語教育学会研究集会第9回中国地区（山口大学）予稿集pp68-73
- 吉田文（2013）『大学と教養教育』岩波書店
- 〔インターネット参考資料〕
- 経済産業省ホームページ「社会人基礎力」
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm>
- 「自由が丘産能短期大学ホームページ」
<http://www.sanno.ac.jp/tandai/employability/>
- 「広島経済大学ホームページ」
<http://www.hue.ac.jp/>
- 文部科学省ホームページ
- ①「大学生の就業力育成支援事業」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/shugyou/1292891.htm
 - ②「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sangyou/1323956.htm